

網本 和(編著)

「理学療法ケーススタディ良好/難渋例の臨床」

森岡 周

(畿央大学健康科学部理学療法学科教授)

対象となる疾患のみを診るのではなく、個々人として診て、それに応じたオーダーメイドな治療を計画し、実施する。そのようなことは、理学療法の臨床において当たり前であると思っけていても、なかなか実践するのは難しい。

本書は編者の長年の臨床経験と臨床研究に基づき、理学療法において、常日頃、ケーススタディを行うことの重要性を説いている。特に、序章となる「ケーススタディのすすめ」においては、福沢諭吉の『学問のすすめ』を例に、ケースから学ぶことの大切さを強調している。理学療法士の経験が知恵として実するためには、机上の知識に加えて、やはり毎日の臨床において思考し、体感したことを統合することが重要である。臨床研究におけるシングルケースパラダイムへの転換を切に願っている編者の文章には、理学療法士として無意識に共感してしまう。

さて、本書は実に 68 例(神経疾患、呼吸循環代謝疾患、小児疾患、整形外科疾患)という多くのケースが紹介され、その具体的なプロフィール、治療目標、治療方法、そしてその成果が記述されている。特筆すべきは、成功例のみならず難渋例の報告も含まれている

ことである。ややもすると、書籍においては、難渋例は極めて普遍的でないことから、その記載は躊躇せざるをえなかった。したがって今まで、理学療法に関連する書籍において、ケーススタディを記述したものは数あるが、どれも成功例、あるいは予後良好・不良例がほとんどであり、それをするによって、表面的な記述にとどめられてきた。一方、学術雑誌においても難渋例の報告については、特異的なケースあるいは速報的なもののみ取り上げられてきたのも事実である。

しかしながら、最近の EBM 実践において、成功例のみならず難渋例の報告も、その価値が認められるようになってきた。これは成功例と難渋例の個々人のプロフィール、介入方法、成果などを比較考察することで、病態および障害の差異を明確化し、そして解決すべき問題は何かを提起し、新たな治療的仮説を生み出すことが、科学的な臨床介入であることに関係諸氏が気づいたことが大きい。母集団でまとめ、法則的な治療的介入を求めることのみが科学的根拠のある臨床ではなく、ケーススタディを多施設間で共同して行うことこそが、理学療法のエビデンスを構築するための先行されるべき方法である。その先駆的な本書は、その意味において大変に価値ある 1 冊である。

●B5 判 327 頁

定価 7,140 円(本体 6,800 円+税 5%)

2008 年 中外医学社・刊